

## 第11回「ハンガリー旅の思い出」2014年コンテスト作品

堀田浩さんの作品

### 思い出いっぱい 妻と私のハンガリー

#### 1. 旅の始まり

会社から貰える最後のチャージ休暇。

5年前にベルリンからドレスデンへ向かう列車の中で、このまま乗っていればブタペストに行けるんだねと妻と話した時から、今度のハンガリー旅行は決まっていた気がする。

いやもっと前だったような気もするかな。いつかはハンガリーに行こうねと。

ブタペストへ向かう機内、直前の予報では天気が心配だったが、高度を下げていく機体の小さな窓から覗くと、雲が切れ濃い土色と広がる緑が視界に飛び込んできた。これから始まる旅にさらに期待が高まった。

降りた滑走路の外は一面に芝が広がっていた。草木を1本も見なかった経由地ドーハとは、対照的な光景であった。空港ビルもどこかローカル空港といったこじんまりとしたものだった。

機体の小窓の外の芝の上を1匹の蝶が漂っていた。そののどかな光景に、成田を発ってから長時間フライトでの疲れもホッと和らいた。

空港で7日有効の交通券を購入し、バスからフェリヘジ駅で鉄道を乗り継ぎ西駅に着いた。

クラシカルな西駅横の、世界一豪華なマックでウエルカム・ドリンクし、一息ついてから、重たいキャリーバックを引きずりホテルへ向かった。

チェックインし荷物を部屋に置くと、早速に外へ飛び出した。一目ドナウ川へと。

あいにくの曇り空で、“青きドナウ”とはいかなかったが、悠然と流れるドナウを目の前にハンガリーに来たんだなと、あらためて実感した。ドナウ川の向うには王宮が、こちらには堂々と国会議事堂が見える。何回もTVの旅番組で見てきた、あの光景が目の前に広がっていた。



#### 2. 温泉

温泉ならやっぱり日本だ。プールみたいで温泉という感じはしないし、この短い滞在期間に行きたいところが山ほどあるのに、と思っていたが、妻と息子に、ブタペストへ行ったら温泉に入らないとねと言われ、そんなものかと予定に無理繰り入れ込んだ。

ブタペスト2日目の朝、まず向かったのがセーチェニ温泉。ロンドンに次いで世界で2番目に古いメトロ1号線へと乗り換えた。昔の銀座線にも似た黄色い小さな車両。途中の駅もレトロで、しかも地下鉄なのにすぐ地面の下を走っているため、ほんのりと地上の光が差し込んでいる。なかなかおしゃれで味わい深い。ホームに降りそのまま短い階段を登るとすぐに地上へ出た。目の前のクリーム色の宮殿のような建物が、市民公園にあり親しまれているセーチェニ温泉。さっそく中に入りリストバンド型のチケットを購入し、どうしたらよいかよくわからぬまま、キョキョロしながらも前の人に倣って自動改札をくぐった。

水着に着替え、いくつもある内湯を通り抜けて出た宮殿の中庭にプールが3つ並んでいた。

朝のためか人はそれ程多くなかったが、カップルが肩を並べ語り合ったり、プールサイドに寝ころぶ人、皆思い思いにのんびりと過ごしている。例のチェスおじさん達もいる。

温泉は体の芯に沁みる熱い湯が！と思っていたが、ぬるめの湯が長時間くつろぐにはちょうど良い。宮殿のような建物に囲まれた空間、朝の清廉な空気に抜けるような青空と白い雲。いつしか気持ちよさにハマってしまい、時間の経つのも忘れてしまった。

なごり惜しく内湯にもいくつか浸かって温泉を後にした。

外は市民公園、湯上りにそよとした風が心地よかった。



2つ目の温泉は、センテンドレからの帰り道。

バッチャーニ駅で郊外電車を降り、マルギット橋の袂からドナウ川を1本奥に入った道をしばらく歩くと、古い石造りの建物が見えてきた。

明るい感じのセーチェニとは対照的に、洞窟風呂のような雰囲気。元トルコ占領時代からのと考えると歴史の重みも感じる。特にドーム屋根の中は、トルコ時代は湯船ではなかったのだろうが、今はたっぷりの湯が張られている。旅行前に映画「テルマエ・ロマエⅡ」を見てきた。時代は違うものの、タイムスリップをしたような感じをいだかせ、でもこれはこれで落ち着き、これまでのハードスケジュールの疲れをゆったりと癒すことができた。

思えば、ハンガリーで温泉なんてと思っていた自分が恥ずかしく、妻と息子の言に従ってよかったと思った。

3つ目の温泉は、ゲッレールト温泉といきたいところであったが、時間の関係で建物の内部から、ガイドブックで何回も見た、あのゴージャスな温泉プールをちらと眺めて、わずかな満足とちょっぴり心残りを残し、旅の思い出とした。

それにしても3者3様の温泉、ハンガリーの温泉、なかなかのものだ。

### 3. ドナウの流れとディナークルーズ

ゲッレールトの丘から急な坂道を転げるように下ってきたバスを降り、緑の自由橋からドナウを眺めると、幾艘もの遊覧船が岸に繋がれている。自分たちの乗る船はどこか。

一艘一艘眺めながらようやく船着き場に辿り着いた。

大方の客は既に席に座り仲間とのおしゃべりに興じている。

天井までガラス張りの明るい船内。白いクロスが掛かったテーブルにグラスに入ったキャンドルと黄色い花が可愛い。二時間半の船旅に段々と期待が高まる。



まずはシャンパンを手に、ブタペストでの楽しいひと時に、そして妻の誕生祝に、乾杯！

料理は食べきれないと思い、コースでなくアラカルトで予約していた。前菜のフォアグラのテリーヌは口に入れた途端溶け、最高に美味しかった。船はやがてマルギット島を周回し折り返すと、日が落ちドナウに少しずつ闇が迫ってきた。昨日その議事場の華やかさや、静寂の中に歴史ある王冠を目にし、感動した国会議事堂が再び視界に入り大きくなってきた。

ちょうど船がその手前に来た時、闇に沈もうとしていたその巨大な建物がライトに浮かび上がり黄金色に輝きを発した。それは急速に周りが闇に包まれるのと正反対に輝きを増し、見ている私たちを圧倒した。“オー！”という世界共通の感嘆の声があちこちで上がり皆一斉にカメラのシャッターを押していた。続いて頭上に迫るくさり橋の輝きとともにこれが“ドナウの真珠”と称賛されるブタペストの夜景を満喫した。

灯りを落とした船内は、生演奏とともにダンスタイム。ワインや料理と素晴らしい夜景に心から酔っていた私は、照れくさを捨て思わず妻の手を取り、ゆったりした音楽に身をまかせた。いつの間にか船内の真ん中において、周りから拍手をもらって照れくさかったが、でも妻はちょっぴりうれしそうにしていたかな。



船を降りた後も、岸辺のカフェテラスから流れてくるハンガリアン舞曲に、妻はリズムをとって手拍子。お店のお客の誰よりもノリノリだった。

#### 4. 歴史旅

ハンガリー建国から1千年余が経過している。日本人と、もしかしたら共通の祖先を持つかもしれないヨーロッパ唯一のアジア系民族。でもこれまでの道のりを考えると決して平坦ではなかった。欧州を旅するとその文化や自然を羨ましく思う一方、島国の日本はつくづく幸せだと思う。ハンガリー1千年の歴史は独立と領土を守る戦いの連続であったようだ。今も歴史の狭間で周辺に分散しているマジヤールの同朋が沢山いる。

それだけに祖国への想いと平和への願いは人一倍強いのではないかと感じた。

市民公園の英雄広場の聖イシュトバーンと建国7部族の像、そして王宮や国会議事堂前のイシュトバーンの像を見ながらそんなことを思った。

国会議事堂広場の近くには、「ハンガリー動乱」の際の銃弾の跡が残っている。いや残してあった。自由広場の前の道路にも追悼のメッセージが並べられていた。

これも旅行前にこの動乱を描いた「君の涙ドナウに流れ」のDVDを見てきていたのでその光景が目に浮かんだ。今観光客で賑わう議事堂広場に自由を求める市民が何万と集まり、そこへソ連の戦車が…。自分の生まれた年に、ここでそのような悲劇があったということが、俄かには何か信じられない。

今こうして世界中から観光客が集まり、自分も妻とここに居られることが、とてつもなく幸せなことだと感じられた。



国会議事堂の方を見つめる「ハンガリー動乱」当時のハンガリー首相「ナジ」の像。  
その眼差しはやさしくも何か悲しそうにも見えた。

## 5. 出会い

これまでもヨーロッパの旅では、心に響く名曲を今の世まで残してくれた偉大な音楽家達との出会いを楽しんできた妻と私。今回妻は、「カンパネラ」や「愛の夢」のリストとの出会いを楽しみにしていた。短い滞在の中で限りはあったものの、思い出づくりは出来たようだ。

そしてもう一人、私達には出会いたい人がいた。ナンドール・ワグナー。

ハンガリー人でも知る人は少ないのかもしれない。

ウィーンで活躍した建築家、オットー・ワグナーの甥っ子であり、第二次大戦では祖国ハンガリーのため戦い、さらに東西冷戦の中で「ハンガリー動乱」でもリーダーの一人であった。さらに芸術面でも優れた才能を持ち、しかし歴史の波に翻弄され夫人の国、日本への亡命等、数奇な運命を生き抜いた人物。

最初の出会いは、さらに半年前ウォーキングの途中立ち寄った中野の哲学堂公園だった。

公園の片隅に、円を中心に配された世界の著名な宗教家・哲学者達の彫像群。

その時は作者名も無く、気になりながら写真に収めて立ち去ったが、その後ふとしたことから作者ナンドールの一生を描いた本を読み、その生い立ちからこれらの彫刻等を残した人生に引き込まれてしまった。

彫像は激しく揺れ動く祖国の歴史の中で、彼が時代の中で生き、悟ったものを現わしているのだろう、と思っている。

その同じ彫像群が、ゲッレールトの丘にある。だがわかりづらいらしい。案の定、トラムからバスに乗るまでは順調だったものの、降りるバス停がわからなくなってしまった。

バスは丘の頂上を過ぎ、やがて下り始める。このままでは丘に一步も立たぬまま、下に戻ってしまう。だが次のバス停にはなかなか着かない。あせりも通り越したころ、ようやく止まったバス停で降り、丘に戻るため反対車線のバス停に向かいかけたところ目に入った1本の標識。そこには「哲学の庭」、何と日本語で書いてあるではないか。

95%以上あきらめていたのに、この逆転ホームランに「神様はやっぱりいるんだよね。」

そこから坂を上った公園の奥に彫像達は並んでいた。そこは眼下にドナウの流れ、王宮から対岸の旧市街を見渡せる絶好の場所でもあった。

彫像が囲んでいるサークルの前の高台に、地元の青年らしい2人の男性が腰を降ろしていた。写真を

撮ってもらいこの彫像達のことを聞いてみたが、よく知らないらしい。

彼は彫像よりも、その前に立てられている「哲学の庭」と漢字で書かれた小さな石の標識が大変気に入っていて、よくここを訪れるらしい。お互いに片言英語ながら、彼にこれらを造った誇らしく素晴らしいマジャー人であることを伝えようとしているうちに、初めて会ったのに何か心が通じた気がして、最後は硬い握手をして別れた。

言葉もよくできないのに、生意気にも団体旅行を避けて個人で旅行するといろいろ味わえる楽しみがある。



道を聞くのに一言二言交わしただけの縁、後ろを歩いていた買い物袋を下げた女性から「こんにちは。」と突然日本語で声をかけられびっくりしながら、ちょっとうれしかった。

公園で偶然に出会った野外フェスティバル。色鮮やかな民族衣装を着て、歓声をあげながら軽やかなステップを踏む女性たちに、「すご〜い！」と思わずつぶやいた妻に、「すごいでしょ！」と日本語で語りかけてくれた地元の女子大生。習いたての日本語で一生懸命伝えようとしてくれる姿が、とても爽やかで可愛かった。まさに「一期一会」。

ここに来なければ一生言葉を交わすことのなかった人達。今日もきっとブタペストでいつも通りの生活を送っていることだろう。

## 6. 旅を終えて？

他にも伝えたいハンガリーでの思い出は尽きない。

宮殿内のようなカフェジェルボーで食べた“ドボシュルタ”。胃に沁みる“パーリンカ”満腹で苦し〜と言いながらも、意外と食べられてしまった“パラチンタ”。ユニークな味だけどくせになる“ウニクム”。



センテンドレのお土産、指人形のお店で

豪壮華麗なオペラ座、鮮やかな天井画の下の巨大なシャンデリア。パンノンハルマの修道院、ハイドンの仕えたエステルハージ宮殿。静かなショプロンの街並み。可愛い街センテンドレへの小旅行。中央市場での買い物。それと、駅前広場でやっていたツインバロムやバイオリンのしびれるような超絶技巧によるハンガリー民族音楽等々。どれも忘れえぬ思い出だ。

最後王宮からの夜景を見ずに来てしまったのが、ちょっぴり心残りだった。

帰国ししばらくして迎えた私の誕生日。白金にあるハンガリー料理店で、旅の思い出話をしながら妻が

祝ってくれた。今妻は、リストの“ハンガリア狂詩曲”を一生懸命練習している。

11月には栃木の益子にある“ワグナー・ナンドール アートギャラリー”を訪れ、またあの彫像達に再会しようと思っている。

そうだ、まだキッチンの棚に取って置きの土産“トカイ”ワインがある。

益子から帰ったら開けようかな。

まだまだ私たちのハンガリー旅行は続いている。

---